工藤喜作先生を偲んで

谷川　多佳子

工藤喜作先生は2010年1月22日に亡くなられた。ご病気であることを知らなかった。ご逝去を知ったのは24日で、当日私は日本―チュニジア2国間セミナーで司会をやっていて懇親会の間も、携帯電話を切ってあったので、夜11時半を過ぎてからの同僚の電話ではじめてわかった。しかも翌日からは奈良の東大寺へチュニジア人の学者5人をつれていき、別当の森本公誠先生にお会いして、話し合いの場を持ち、私が通訳を務めることになっていた。急なことで時間の余裕もなく他の代役を探すことがかなわず、けっきょくご葬儀に出席できないことになり、ほんとうに辛かった。東大寺で祈るしかなかった……

工藤先生との実際のお付き合い（それはまた私と筑波大哲学との結びつきでもあるが）が始まったのは1987年からだった。むろんそれまでに先生の『エティカ』や、ご論文、解説書などに、ある好感と親和性をもって、ふれていた事実はあった。当時札幌にいらっしゃった花田圭介先生を通じて推薦いただき、筑波大学に採用されることになった。その人事の過程で私の論文（主にデカルトに関する）をていねいに読んでくださったが、仕事の内容について、あたたかい、包容力のある批評をくださったのが、ありがたかった。日本でしっかりした哲学の教育をうけないでフランスに行ってしまい、パリでは相当に勉強して学位論文を提出したものの、日本に戻ってから、研究そして教育をどのようにやっていったらよいか不安を抱えていた。帰国後最初に出会ったのが札幌での花田圭介先生で、学位論文を読んでくださり、いろいろなアドヴァイスをいただき、またそのご縁で、日本での最初の教職を札幌医科大学で始めることになった。花田先生も亡くなられたが、そのお誕生日が1月22日であったことに、不思議な縁を感じてしまうのも感情的な思い入れだろうか……

私が工藤先生に負うものはあまりに多く、深いものとなっている。筑波大学への採用が内定するや、事務方の手続きが始まる前に、筑波での単身宿舎の申し込みをやってくださり、遠く不便なところにならないように考えてくださった。工藤先生

と筑波大でご一緒できたのは 6 年間だったが、その間、ローマ大学への報告のための出張、パリ大学エクリチュール研究センターでの半年の研究員、そして最後に文部省（当時）の 10 ヶ月のフランスでの在外研究、とすべて工藤先生が支え、配慮してくださることにより実現していった。大学での授業のやり方や内容設定についても、きわめて具体的なアドヴァイスをいただき、哲学の専門の授業を初めてやることで右往左往していた当時の私にとって―当初は授業の準備がたいへんで、まさに予習に追われる劣等生、というありさまだったから―、ありがたい限りだった。あたたかく、しかもしっかりと大切な点は指示してくださる貴重なお教えを、いつもいろいろな面でいただくことができたのは、幸運というしかない。

筑波で拝見していた工藤先生は、当時 50 歳代の先生方のなかで最も健康でいらっしゃった。先生方がお茶を飲む部屋で話題になることのひとつに、健康診断の結果があった。工藤先生だけは、その数値に問題が一つもないという、すばらしい健康状態が、よく話題になったものだった。吾妻 4 丁目の単身宿舎からはいつも自転車で通勤なさり、雨の日もレインコートで自転車でお帰りになる姿をみて、正直びっくりしたほどだった。お酒は特にたしなまれず、大の甘党で、公務で出張した折も、居酒屋でなくて、おしるこ屋に入るとうかがい、ほほえましい感じだった。

筑波大を定年なさったあと、お目にかかる機会はそれほど多くなかったが、著書や翻訳をお送りすると、そのつど、あの篤実で堅固な字体で、丁寧なお手紙をくださるのが慣わしとなっていった。最後にお手紙をいただいたのが 2009 年夏だった。お送りした私の著書への批評・感想とともに、49 年にわたる大学の勤務がやっと終り、秋田の温泉にいらしったことが記されていた。その帰途、汽車のなかから見る風景について、大宮以降の風景に緑がなくなりコンクリートの世界になっていることに、驚くとともに疲れを感じる、とあった。今にして思うと、おそらくはご病気ゆえに特にこのことが神経に響いていたのかもしれない。そのことを知らず、しかしふと、気になってはいたのだが。そしてお手紙の最後には、『エティカ』の翻訳に力を集中していることが述べられていた。

先生の略歴とご業績については『スピノザーナ』11 号が記載してくださった。先生へのインタヴュー、追悼のエッセイも読むことができた。謝意を表したい。

『筑波哲学』には最近号にいたるまで毎号寄稿してくださり、院生たちの活動を支えてくださっていた。工藤先生が私に望んだ第 1 のことも、私自身の研究・教育の進展とともに、筑波大の哲学を育てていくことだった。私自身、ある程度の努力

はしたが、十分にその責務を果たせないまま定年を迎えることを恥じている。しかし、続いていく若い先生方、院生諸君にその希望はつなげていけるだろう。

ただやはり、私たちの側からは工藤先生のご逝去はあまりに深い痛恨であり、かけがえのない方を失ったという気持ちでいっぱいである。が、信仰をお持ちの先生は、天で安らかな魂となり、私たちを見守ってくださるだろう。

（たにがわ・たかこ　筑波大学大学院人文社会科学研究科哲学・思想専攻教授）